

楡 周平

猛禽の宴

もうきんのうたげ

続・Cの福音

猛禽の宴

もうきんのうたげ

続・Cの福音

楡周平

宝島社

楡 周平

にれ・しゅうへい

1957年生まれ。米国企業在職中の

96年に書いた「Cの福音」がいきなりベストセラーに。

その後、作家として独立。97年春に出版した

「クーデター」で、ベストセラー作家としての

地歩をさらに固める。日本人離れしたスケールの

大きなストーリーテリングが、つねに注目を集めている。東京都在住。

主な著作：「Cの福音」「クーデター」(ともに宝島社刊)

猛禽の宴——続・Cの福音

一九九七年十二月十二日 第一刷発行
一九九七年十二月三十日 第二刷

著者…楡 周平

装丁…岩田友仁

発行人…蓮見清一

発行所…株式会社 宝島社

〒一〇二東京都千代田区一番町二五

電話…営業部03(3234)4621／編集部03(3239)5746
振替…0017011170829(株)宝島社

印刷…壮光舎印刷株式会社

製本…大口製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

1997 © Printed in Japan

ISBN 4-7966-1276-9

猛禽の宴

Special Thanks to

As I was telling inspector David Tambara and
Officer David Yukio Kamita of San Francisco Police Department
the other day, who are dedicated to fighting
against crimes 24 hours a day,

this book is purely fictional and does not depict actual events.

However, your very interesting stories and information about
the actual crimes provided me tremendous inspiration and insights into
what street crimes are all about.

To the CBS “60 Minutes” field crews, staffs and journalists,

I thank you very much for the wonderful programs
that always teach me about totally unknown world
in the US as well as on this planet.

いつも辛抱強く銃器に関するアドバイスに惜しみない労力をさいてくれる T.S.に。
米国サイドでの取材コーディネート、資料調査、
いつも気まぐれで突然やってくる私の要求に、忠実に答えてくれる J.C.H.L.に。
むずかしい質問に丁寧に答えて下さった Gary Kussman 氏に。

登場人物

朝倉恭介

主人公。日本の通関システムの盲点をつき、コカインを大量に密輸し、インターネットを通じて販売している。

ロバート(ボブ)・ファルージオ

全米にネットワークを持つ犯罪組織の頂点に立つ男。朝倉恭介の卓越した頭脳を賞賛し、我が子のように思っている。

ヴィンセント・カルーソ

ファルージオの組織の相談役

ジョセフ・アゴニ

ファルージオの組織のアンダー・ボス

フランク・コジモ

ニューヨークのブルックリン、ブロンクスを縄張りにするボス。ファルージオの組織の一員

マグニ・アレサンドロ

コジモの部下

バグ

ニューヨーク、サウス・ブロンクスのラテン系犯罪組織のボス

アンドリュウ・チャン

ニューヨークに進出した香港系新興マフィアのボス

アラン・ギャレット

元合衆国海兵隊戦闘ヘリヘコブラのパイロット。現在は軍の廃棄物処理センター(DRMO)で働く

ミカエル・シャールウッド

人体加工、あるいは異常殺人に快感を覚える男。コジモの組織の死体処理屋。

ナンシー

ニューヨークの超高級コール・ガール

街路灯に灯が点り、夜の帳が下り始めると、ストリートはその貌を一変させる。

昼の長いニューヨークの八月。太陽がようやく沈むのは、八時を回ったあたりのことだが、それよりも早く、廃墟と化したビルが立ち並ぶこの一帯には、沈鬱に淀んだ空気をたっぷりと含んだ闇が漂い始める。三〇度を越えた暑い日中に路肩の消火栓から撒きちらされた水が、まだ乾き切らないままアスファルトの路面を黒々と濡らし、整備されないまま放置され荒れはてた路面のあちらこちらに黒い不定形の水溜まりをつくっている。

サウス・ブロンクス——琥珀色の光に彩られた世界。しかしその輝きは同時に、光に吸い寄せられる羽虫の群れのように、危険な香りに満ちた社会の底辺で蠢く虫たちが動き始める時間がやってきたことを意味した。虫たちは、はるか太古の昔に琥珀の中に閉じ込められて化石となった昆虫のように、この光の中で行動し、そしてこの限られたエリアを守ることに固執する。

夜一〇時。安っぽいナイロン製の薄汚れたショッピング・バッグを手に、古ぼけた紙袋と縦に巻いた毛布を括りつけたカートを押しながら、おぼつかない足取りで歩道を歩くその白人の男は、どう見ても、一夜の宿を探し求めてこの危険な街に迷い込んだホームレスに見えた。生気を失ったように淀んだ眼。夏だというのに垢と汗をたっぷりと吸い込んだ長袖のシャツを身につけている。いまにも擦り切れそうな紐のようになったベルトでかろうじて腰のあたりで止められたダブ

ダブのパンツは、脱ぎ捨てられればそのままの形で立つのではないかと思われるほど、汚れ、暗く変色し、股間のあたりには黒く湿った染^しみが浮いている。まだ昼の熱気と湿度をそのままに残す空気の中で、見ているだけでもすえた臭いが漂^はってきそうだ。

ストリートに面した古ぼけたビルの入口に続く階段では、ラジオから流れる破滅的なラップのリズムに扇動されるようにスパニッシュで会話を交わす七、八人のラティーノの虫たちがたむろしている。ビールやテキーラを紙袋の中の瓶から直接呷^あってはひっきりなしに煙草をふかす。それはやがてマリファナやクラックといったドラッグになり、気まぐれからの犯罪を呼ぶものへと変わっていく。目標や生きがいといった、一般社会ではごく当たり前の人生の指針を示す言葉とは無縁な世界で生きる——それが虫たちの日々の生活だった。

「マザー・ファッキング・シート……」

階段の中央に座った男が、近づいてくるホームレスの男を見るなり、口に含んだビールを路面に吐き捨てながら、頻繁に使う数少ない英語のワン・フレーズを、ゲップをするかのように搾^{しぼ}り出すと、顔をしかめた。

「こ汚い野郎が来やがったぜ……」

ハイティーンとおぼしき男が、怪訝^{けげん}な表情の中にわずかに凶暴な光を宿す視線を向けながら、一人前に悪ぶった口調で言う、無意識のうちに値踏みを始めた。多少なりとも金目のものを持つていそうならば、たちまちのうちに彼らが次の行動に走ることは明白だった。

しかしホームレスの男は、そうした虫たちの存在など眼に入らないのか、重い足を引きずるようにおぼつかない足取りで、目の前を通りすぎて行く。持ち物、そして財産のすべてを入れたと

思われる廢物に近いカートが、一つ歩を進める度に耳障りな軋み音を上げる。

「しけた野郎だぜ」

階段に座った男は、傍らに座った女の頬に鼻を押しつけたまま顔をしかめて吐き捨てるように言う、一氣に瓶の中身を呷り、次の瞬間、空になったそれを紙袋ごとホームレスの男めがけてオーバー스로ーで投げつけた。薄茶色の瓶は放物線を描き、ホームレスの男の垢に塗れた頭をかすめるように飛び去ると、アスファルトの路面に落下し、砕け散った。

しかしそれでもホームレスの男は、何事もなかったかのように、足を引きずりながら黙々と歩を進める。車輪の軋むキーキーという音が、ことさらにその男の無関心さを印象づける役割をした。

「チツ……いかれてやがる……」

ビール瓶を投げつけた男はそう言う、女の肩にまわしていた手を、今度は脇の下から差し込み、早熟なその胸を薄手のＴシャツの上からおもむろに掴んだ。嬌声が上がった。それは同時に、虫たちがホームレスの男への関心をなくしたことを意味した。

ホームレスの男はその嬌声を背で聞きながらコーナーを曲がった。

そこは廢墟のようなビルが立ち並ぶ中であってさらに人氣のない路地で、コーナーに面した建物が撤去された一角は、瓦礫が散乱する空き地となっていた。かろうじて外形だけを残す廢屋に点る灯などあろうはずもなく、窓という窓のガラスはとうの昔に破壊され、ぼっかりと黒い口を開けている。その縁の多くが黒く煤けているのは、虫たちが一時の気まぐれで行なった放火によるものだ。崩れかけた壁面には、猥雑な言葉や意味もない言葉、あるいはこの地域にはびこる千

ンピラたちの勢力誇示の印がスプレーでなぐり書きされている。

それまで一定のリズムで歩を進めていたホームレスの男の動きが変わった。虚ろさからは一変した鋭い視線であたりを窺うと、驚くほどの素早さでビルの一つに身を滑り込ませた。

中はさらにひどい廃墟の様相を呈しており、崩れた瓦礫が散らばる床には、大量のゴミに混じって、クラックの吸引具や、ヘロインを打つのに使われた注射器が散乱していた。男はカートのフレームを右の手で軽々と持ち上げた。明かり一つない室内の奥に、通りから漏れてくる街路灯の光がぼんやりと差している。男は打って変わったしつかりした足取りで、さらに奥へと向かうと、迷うことなくストリートに面した角の部屋に向かった。

男は壁際に身を寄せ、カートに括りつけた荷物を解き始めた。最初に縦に巻いた毛布を外して広げると、次にショッピング・バッグ上部のファスナーを開ける。そこから覗くボロ屑のような衣服を驚愕みにして傍らに放り投げると、中からきれいな布の包みを取り出した。丁寧な手つきで包みを開ける。

布の上に置かれた鋼鉄の肌、窓から差し込む外路灯の明かりに鈍い光を放った。ヘッケラー & コッホ MP―五 SD 三。全長わずか六一〇ミリ、折りたたみ式のプラスチック製テレスコーピック・ショルダー・ストックを引き出しても七八〇ミリにしかないこのサイレンサー付きのサブ・マシンガンは、装弾数三〇発、毎分八〇〇発の発射速度を持つ。九ミリのピストル弾を使用するサブ・マシンガンにもかかわらず、高い命中精度に抜群の信頼性を持つこの銃は、距離によつては、狙撃銃としても十分にその役割をはたしうる性能を持っていた。

男は再びバッグの中に手を入ると、別の包みを取り出した。すでに三〇発の弾丸が装填され

たマガジンが二つ姿を現わす。男はそれを毛布の上に並べると、本体の稼働部が間違ひなく作動するかどうかを手慣れた仕草で確認した。そしておもむろにマガジンの一つを手に取り、MP—五の本体に差し込んだ。

遠く聞こえてくるラップのリズムに乗るように、作業は一定のリズムで淀みなく進み、そこから、この男が銃に関してかなりのエキスパートであることが分かった。

日頃ジョージア州アトランタに居を構えるこの男がラグアーディアに降り立ったのは、この日の昼すぎのことだ。不精髭が顔の半分を覆つてこそいたが、短く刈り込まれた頭髮は清潔に手入れされ、仕立のいいスーツに身を固めた男の姿は、商談で疲れはて、たった今ニューヨークに帰着したビジネスマンといった風情で、人目を引くような存在ではなかった。迎えに出た男たちもまた、髭こそ生やしてはいなかったが同じ身なりをしていた。それはこの空港で日に何度となく繰り返されるビジネスマンの邂逅風景そのもので、これもまた誰の注意を引くものでもなかった。金で殺しを請け負う……それがこの男の仕事だった。

殺し屋——それは闇の世界とは切つても切れない存在として、その背後につきまとう影のようなものだが、実際の殺しは必ずしも当事者である組織の人間が行なうとは限らず、むしろ雇われたよそ者によって行なわれることが圧倒的に多い。実行者は単に殺しを行なうためにその地に向かい、仕事が終わればたちどころにその地を離れる。初めての接触は被害者に死をもたらし、そしてそれは同時に永遠の訣別である。その瞬間以外に何一つ被害者と加害者が接点を持たない殺人は、形の上では通り魔的犯行であり、事件を管轄する警察の捜査を絶望的なまでに困難なものにする。もちろん州の管轄を越え全米に捜査網を持つFBIという組織も存在するが、それとて

すべての犯罪者の動向を把握しているわけではなく、こうした殺人事件の背後関係を明らかにすることなど、およそ不可能なことなのだ。

男はすべての部品を組み立て終わったことを確認すると、パンツのポケットから時計を取り出した。蛍光塗料の塗られた文字盤の上で、二つの針がおおよそ一時を差している。男はサブ・マシンガンを膝の上に抱えると、ゆっくりと汚れた壁に背をもたせかけた。

予定の時刻まで、まだ一時間ばかりあった。

マンハッタンのイーストサイドにあるロバート・ファルージオのマンションの書齋で、朝倉恭介は食後酒のリキュール、グラン・マニエの入ったグラスを傾け、甘い琥珀色の液体を静かにすすった。

粘度のある液体が舌の上を滑らかに覆うと、喉から鼻孔にかけて独特の香りが仄かに駆け抜けていく。恭介の手の中で、大きき割には持ち重りのするバカラのリキュール・グラスの下部に施された細かなカットが、柔らかな間接照明の中で、クリスタル特有の優雅な光を放つ。

グラン・マニエの香りに混じって、ファルージオがくわえた葉巻から漂ってくるハバナ葉の芳香が恭介の嗅覚を優しく刺激する。

旅の疲労は、時間ではなくその移動距離に比例するとはよく言ったものだ。それがたとえファースト・クラスのものであったにせよ、一三時間、八〇〇マイルの長旅はそれなりに恭介の体を疲れさせていた。しかしそれも、ファルージオ専属のシェフが精根を傾けて作ったイタリ안의フルコースを極上のワインとともに平らげた体には、いまや心地よいものとして感じられこそ

すれ、決して不愉快なものではなかった。

はしりのペアーにプロシユートを添えたアントレ。オープン之余熱で中心の脂がしつとりと染みだした鳩のローストに、ローズマリーのソースが添えられたクスクスのサラダ。そして、シンプルでありながら太陽の味そのもののような芳醇な香りと色彩のトマトソースがたつぷりとかかったパスタ……。見事な料理には最高のワインをとばかりに、オークションものの逸品である四五年のシャトー・ムートン・ロートシルトやシャトー・ラフィット・ロートシルト六一年というヴィンテージが、長い晩餐の間に絶えずグラスを満たすべく惜しげもなく抜かれた。もちろん、こむずかしい講釈など一切なしでだ。メドックの格付けを変えたとまで言われるシャトー・ムートン・ロートシルトの一本だけでも、ファースト・クラスで東京とニューヨークを往復できるだけの値段になるだろう。その一つを取ってみても、ファルージオが恭介に抱く思いの深さが窺い知れた。

晩餐の席にはファルージオとその妻ノーマの他に、組織の相談役コンシリエーリを務めるヴィンセント・カルーソとアンダー・ボスのジョセフ・アゴーニの二人の男がいた。

ニューヨークに君臨する組織ファミリーは、完全な階級社会である。ボスであるファルージオを頂点に、その代理を務めるアンダー・ボス、それと同格の地位にボスの相談役のコンシリエーリがいて、この三人が最上位を形成する。その下にはカポリジニと呼ばれる何人かのキャプテンがおり、彼らはそれぞれ三人程度の自分の兵隊を持つ。もっとも兵隊といっても、人数からも分かるようにけちなチンピラの類をいうのではない。それは彼らの地位を、ボスを社長、アンダー・ボスを副社長というように、そのまま普通の社会の企業の役職に当てはめて考えればより鮮明になる。た

たとえばカポリジニは普通の企業の取締役、そして兵隊は部長といった地位に該当するといえるだろう。つまり役のついた幹部に当たるわけで、ここまでの人間たちをメイド・メンバーと呼び、ただの構成員とは一線を画す。当然のことながらメイド・メンバーになるためには、それ相応の実績を組織の中で上げることが要求される。

実績とはずばり金である。メイド・メンバーになるためには、年間一〇〇万ドル単位の金を組織に上納しなければならない。メンバーの見直しはほぼ五年毎に行なわれるが、新メンバーの人は、基本的に欠員があつてのことである。それゆえ、いったんメイド・メンバーに選ばれた者には最高の敬意が払われ、想像もつかないような恩恵が与えられる。メイド・メンバーであるか、そうでないかでは、まさに天と地ほどの違いがあるのだ。

その意味ではいまここにいるカルーソとアゴーニの二人は、ファルージオと並んでニューヨーク、いや全米の組織の頂点に立つといつても過言ではない男たちであつた。

「さて、ここからはビジネスの話だ」

ディナーに同席していた妻のノーマがいなくなったところで、ファルージオがおもむろに口を開いた。長年連れ添つてきた妻が、夫の生業がどういふものであるか知らないはずはなかったが、生臭い話を家族の前でするほど、彼は無粋な男ではなかった。

「君たちにキョウスケを引き合わせるのは今日が初めてのことになる。最初に言つたように、彼が私の息子のリチャードの親友だつたことには違ひないが、実はそれだけではない。私にとつても特別な友人と呼ぶべき人間なのだ。今日のディナーに君たち二人を呼んだのは、それを知つておいてもらひたかつたからでな」

和んでいた空気が一変した。笑い声が止み、適度に緊張した空気が漂い始める。二人の目が見えなくなるほどの暗闇が、一瞬の間にファルージオと恭介の間を往復する。

「彼が、日本でコカインを捌いて莫大な利益をもたらしている例の男だ」

二人の頭がゆっくりと恭介に向けられ、称賛の視線が注がれた。

ファルージオの命によって、日本に新たなコカインのマーケットを開拓するために、船積み情報シッピング・インフォメーションを組織にもたらす『鸚鵡オウワ』と、日本国内でのコカインの卸し元となる『ひよこ』をリクルートすべく組織が一斉に動いたのは七年ほど前のことだった。

全米に散らばる手下たちが、白い粉の味を米国に來た日本人に覚えさせ、いったんその魔力にはまったと見るや、帰国の後もコカインを入手できるインターネットのボックス番号と、その代金の振込先となる香港の銀行口座を、沈黙の誓いと引き換えに教えたのである。当然のことながらこうした働きをしたメンバーは、組織の中ではるか底辺に蠢く下っぱたちで、からくりの全体像は極秘とされた。情報は分断され、個々の役割のみが与えられたのである。全体を知るものは発案者の恭介、そしてファルージオ、その片腕となるこの二人の最高幹部だけだった。

暴力に裏付けられた恐怖の力を全面に押し出して、組織が利益を貪ったのは過去のことである。もちろんいざとなれば、いまでも恐怖の力をもって相対することを忘れたわけではないが、マフィア壊滅を目指した国家権力の前に、組織は地下に潜り、ビジネスははるかにソフィストケートされたものに進化したのである。当局の厳しい取り締まりが、犯罪組織をさらに巧妙かつ強力なものに育て上げたという皮肉な現実だった。

しかし、こと組織という点に限ってみると、それを支配する上での絶対的要素には何の変化も

なかった。組織を支配する力とは、すなわち資金力である。頂点に君臨する者が一方的に金を吸い上げたのでは組織は成り立たない。従う者が払う以上の利益をもたらすことで初めて、そこに主従の関係が成立するのだ。一方で、決められたテリトリーの中で生じるビジネス・チャンスには自ずと限界があるのも、また事実である。そのパイを猛禽のような人間が奪い合えばどうということになるか、火を見るよりも明らかだ。ある時は鞭を振るい、またある時は餌をやる。それを使い分けるのがボスの役目であり、それは何よりも他のメンバーを凌ぐ圧倒的資金力の裏打ちがあつて初めて可能になることだった。

そうした観点から見れば、恭介による日本市場の開拓は、長い組織の歴史においてもまさに革命的な出来事だった。かつて恭介がファルージオに言つたように、日本は組織にとつて処女地そのものであり、どの組織ともコンフリクトを起こさない、新しく、そして何よりも豊饒な市場だった。そこから上がる莫大な利益はファルージオの力に直結するものであり、それゆえに恭介の存在やそのからくりは秘密とされたのである――。

「君の働きは、ことあるごとにボスから聞いている。ビジネスは順調なようだな」
アゴーニがコニヤックの入ったグラスを口に運びながら言つた。

「ええ……」

恭介は曖昧な返事を返しながら、瞳の中に困惑の色を浮かべてファルージオを見た。

マホガニーでできた机の引き出しを開け、中から黒い革張りのファイルを取り出しながら、「キョウスケ……この二人は大丈夫だ。すべてを知っている」

そう言うと、ファルージオは縁なしの老眼鏡をかけ、ファイルのペーパーを見た。